

副鼻腔炎について

監修：笠井耳鼻咽喉科クリニック 院長 笠井 創 先生

副鼻腔の特徴

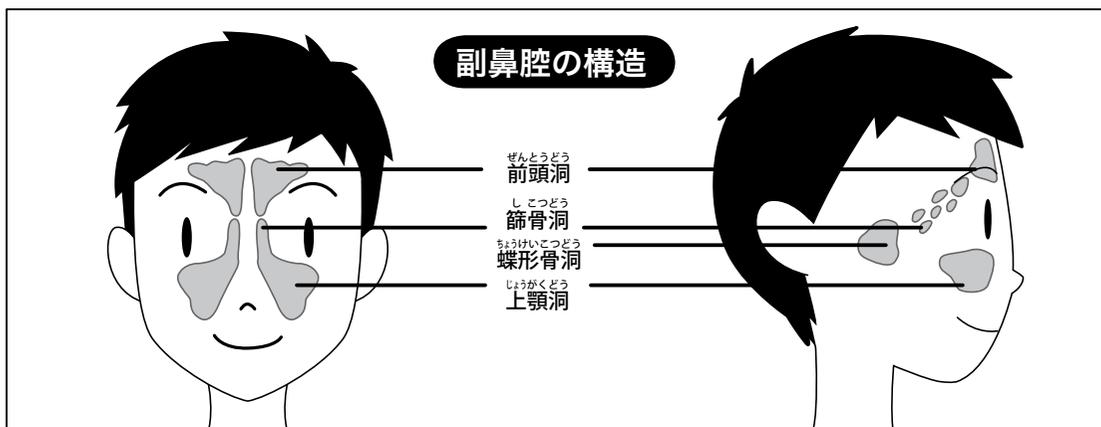
副鼻腔炎とは副鼻腔の粘膜に炎症が起き、そこで大量の粘液が作り出され鼻へと溢れ出て黄色い鼻水が出たり、強い痛みがあるなどの症状が特徴的です。またこれらの症状のほかに、鼻風邪が2週間以上続くなどの症状が見られるようなら、副鼻腔炎を疑いましょう。蓄膿症とはこの副鼻腔の炎症の総称で、医学的には副鼻腔炎といいます。

副鼻腔炎が起こる副鼻腔とは、鼻腔に接していて鼻や目を取り巻くようにしてある大小いくつかの空洞のことをいいます。左右にそれぞれ4対、合計8個の空洞があり、それぞれ前頭洞、篩骨洞、蝶形骨洞、上顎洞と呼ばれています。4ヶ所ある副鼻腔のどこで炎症が起きているかによって、痛みが出る場所も違います。前頭洞はおでこの痛み、篩骨洞は目と目の間や目の奥の痛み、蝶形骨洞は頭痛、上顎洞は頬や歯に痛みを感じます。

急性副鼻腔炎

副鼻腔炎には急性副鼻腔炎と慢性副鼻腔炎の2つのタイプがあります。急性副鼻腔炎は風邪に引き続き、粘膜の炎症が鼻腔から副鼻腔に広がることが原因で起こります。副鼻腔内の粘膜が腫れて厚くなったり、分泌物が多くなったりします。主な症状は発熱や頭痛、倦怠感、鼻づまり、黄色い鼻汁が出るなどです。まれに副鼻腔の炎症が目や脳にまで広がることがあります。炎症が目まで広がると視覚に異常があらわれることもあります。それが脳にまで及ぶと意識障害が起こることもありますので、注意が必要です。

急性副鼻腔炎の場合、点鼻薬で粘膜の腫れをとり、鼻汁を外に出して鼻の通気性を良くすることが治療の基本です。また抗生剤の内服、炎症を起こしている粘膜へのネブライザー(噴霧器)による噴霧、抗生剤を副鼻腔に注入するなどの方法があります。炎症を鎮



めたり粘液を溶かして副鼻腔や鼻からの排泄を良くする薬も使われ、発熱や頭痛があれば鎮痛解熱剤薬が使われます

慢性副鼻腔炎

慢性副鼻腔炎は鼻腔に膿が溜まった状態で、多くは急性副鼻腔炎が慢性化して起こります。そのほかにある慢性副鼻腔炎の原因は複雑で、急性炎症の慢性化、遺伝的体質、鼻の粘膜が厚くなって詰まってしまう肥厚性鼻炎、扁桃炎、大気汚染、アレルギー、副鼻腔真菌症などいくつもあります。また上顎の歯のむし歯や、周囲の炎症が副鼻腔の中に入り込んだり、飛行機の機内やダイビングなどで、副鼻腔の気圧調節がうまくいかない場合でも起こります。慢性副鼻腔炎の症状は主に鼻に出ます。鼻づまり、粘っこい鼻汁が出る、匂いが分からないといった症状があり、それに続いて鼻汁が喉にまわり喉の炎症や気管支炎が起こることもあります。神経症状としては、頭が重い、注意力散漫、記憶力の低下などがみられますが、急性副鼻腔炎の症状と比べるとそれほど強くはありません。

慢性副鼻腔炎では耳鼻咽喉科で定期的に治療を受けることが一番です。自分で治療するとすれば、点鼻薬で粘膜の腫れをとり、薬を内服する方法がありますが、なるべく早く耳

鼻咽喉科の医師の手当を受けましょう。慢性副鼻腔炎が重症化して鼻腔内にポリープができてしまったり、鼻腔を左右に分けている壁が異常に曲がってしまう鼻中隔湾症などがあると、症状をより悪化させます。この場合、状態によっては鼻の通気性と排膿を良くするための手術が必要となってきます。

予防法

副鼻腔炎の一番の予防は風邪をひかないようにすることです。普段の生活の中で、気温の変化に合わせた衣服の調節、寝冷え、湯冷めなどに気をつけましょう。そしてそれでも風邪をひいてしまったら完全に治しましょう。また適度な運動をし、バランスのとれた食事をとることで全身の抵抗力を身に付けておきましょう。疲労をためこないことも大切です。

【参考資料】

・『鼻の病気が分かる本』
著/飯田 誠 発行/株式会社法研

【写真提供】

・笠井耳鼻咽喉科クリニック 院長 笠井 創

正常な鼻腔



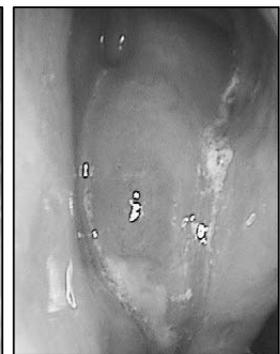
正常な状態の空洞な鼻腔

急性副鼻腔炎



副鼻腔から鼻汁が出ている

慢性副鼻腔炎



慢性副鼻腔炎が悪化し、鼻茸ができています